『ヨーロッパの噴水思想』

三重大学大学院教育学研究科
教科教育専攻美術教育専修
大川　甲

提出日：平成 22 年 2 月 15 日

研究題目『ヨーロッパの噴水思想』

はじめに	p.1
第一章　ヨーロッパの噴水の歴史	p.1
第二章　イタリアの噴水思想	p.19
第三章　ヨーロッパの宮殿の庭園における噴水	p.26
おわりに	p.41

はじめに

水は無形であり留まることを知らず、時に激しく時に静かに、何者にもとらわれないものとして存在している。私たち人間は、その水に恵みを受けたり恐怖を感じさせられたりして、現在まで生き延びている。この生き物にとってかけがえのない水を使った芸術品といえば、何を思い浮かべるかという問かけをしたとすると、噴水という答えを返す人は多いのではないだろうか。現在ではあらゆるところで見ることができ、私たちの心も潤してくれる噴水であるが、これらの噴水はどのようにして生まれ、繁栄し、現在の姿にまで至ったのであろうか。そして、この噴水を取り巻く人々の中で、噴水を通じてどのような思想が生まれ、発展していったのか。水を芸術品にしてしまおうと考えたヨーロッパの人々と、さまざまな時代に合わせて変化していった噴水の歴史を考察し、その他あらゆる角度から噴水を研究した。その中でヨーロッパの噴水思想とはどのようなものであるかを明らかにする。

特筆すべきこととして、なぜヨーロッパに限定した噴水思想を考察するのかを述べておく。元来、東洋思想での人間と自然との関係性は、人間を生み出したのは自然であり、人間は自然物の一部にすぎないというものである。反対に、西洋思想での人類と自然との関係性は、自然は支配・管理すべきものとされている。これはキリスト教の考え方から来るものである。旧約聖書では人間は神の姿に似せて創られ、さらに神によって他の生き物の支配を命じられた。このことから、人間は他の生き物よりも上の存在であるとされているのである。このような人間中心主義の考え方により自然は克服する対象となったのである。

このような西洋思想の下で水もその支配の対象となったことにより、噴水が誕生、繁栄したと考えられるため、この論文ではヨーロッパの噴水思想に限定し、考察をすることとする。

第一章　ヨーロッパの噴水の歴史

■噴水の起源

噴水の起源には、さまざまな説がある。しかしそれらの説は、どれもはっきりとしな

いとされている。

噴水の起源と言われている説の中のひとつとして、湧水起源説がある。これは、メソポタミア文明が栄えていた時代に思想が生まれたというものである。チグリス川とユーフラテス川に挟まれ、肥沃な大地をたたえていたメソポタミア平野の中には、いくつかのオアシスが点在していた。そこには自然と水が勢いよく湧き上がっている場所があり、その湧き上がる水に対する人々の信仰が、噴水の起源であるとする説である。自然と湧き上がる水は神聖であり、その場所は綺麗に装飾され、人々が通うようになったとされている。水は人間の生存に欠かせない命の源であり、かつ、大雨や台風など災いをもたらす存在でもあったため、このように水を信仰の対象とする動きは古代から存在していた。また、このような考え方はメソポタミア文明の中だけではなく、様々な文明の中、特に、水が貴重だと考えられていた地域でよく見られた考え方である。

また、元より人工的に水を操り、鑑賞用として身近に噴水を置いていたという説もある。ホメロスが書いた叙事詩『オデュッセイア』の中に記録されているもので、紀元前1000年ごろ、アルシニュウスの宮殿に噴水があったとされている。しかし、ホメロスが実際に存在していたのか定かではないという論争もあるため、この説もはっきりとしていない。

このように噴水の起源には諸説あり、まだ解明されていない部分も多く残されている。

■古代ギリシア時代

古代ギリシア時代に、樹木や泉、川など、あらゆる自然の中に神が宿るという考えが生まれた。それらはニンフと呼ばれた。ニンフとは普通若い娘で、神々に愛されて子どもを生む場合もあったが、人間に愛の感情を吹き込んだり、未来を予言する力を持ったりするともされていた。また、健康をつかさどり、安産をもたらす神ともされていた。さらに雨乞いの際の祈りの対象にもなっていた。そして、そのニンフの概念がローマにもたらされ、泉の神と同一視されるようになったとされている[1]。

また古代ギリシア時代には、たくさんの噴水が存在していたとされている。その噴水というのは自然と地下から湧き上がっているもので、いわゆる泉や湧き水と呼ばれるものである。その噴水から水を引き、その水を大きな石で造られた容器に貯水していた。しかも、その容器はかなり大きなものが造られ、清らかな水を保つため容器を樹木で覆うなど、さまざまな工夫がなされていた。そして、その噴水は神々やニンフ、伝説とさ

れている英雄に捧げられ、主に神殿の近くや、神殿の中に設置されたとされている。

神殿に設置された神々に捧げるために、伝説をモチーフとした噴水が数多く造られた。例えば、コリントのピレーネには白い石でアーチを造り、その中から外の水盤に水を噴出させている噴水があった。伝説によれば、この噴水はニンフであるピレーネと関係のあるものであり、ピレーネが女神ダイアナに殺された息子のことを思い出しながら悲しみ流した涙が、この噴水にまで届いたと言われている。その他にもダイアナとベレロフォンの像の近くには神馬ペガサスの口から水が噴き出るものや、銅でできた海神ポセイドンが乗ったイルカが口から水を噴出させるものなど、コリントの町には多くの噴水があったとされている。このポセイドンの噴水はテーゲネスの作品で、規模や装飾、この噴水を取り囲む柱の多さなど、目を見張るものであったとされている[2]。

このように当時の噴水は、さまざまな神や崇拝されるべき対象の人物に捧げられたもので、噴水と神話は共に存在していたと言える。

■古代ローマ時代

古代ローマ時代でも水への信仰心は続いており、この時代に特に信仰を集めていたのが泉の女神ユトゥルナである。

ローマ市にあるフォーロ・ロマーノ広場のウェスタ神殿の近くに、ユトゥルナに捧げられた神殿が造られ、毎年、元日にユトゥルナリア祭という祝祭が催された。言い伝えによるとユトゥルナはゼウスに愛され、泉の支配を得た。また、出入り口と扉の神であるヤーヌスの妻となり、泉の神であるフォンスを生んだ[3]。泉の女神ユトゥルナを讃えるこの祭は現在でも続けられている。ユトゥルナは前述したニンフの概念がローマにもたらされ、泉の神と同一視されるようになった代表的な例である[4]。

また、ユトゥルナと同様に信仰の対象になったもので、森の泉のニンフ、あるいは女神であるエージェリアがいた。エージェリアは古代ローマの2代目の王、ヌマ・ポンピリウス王の妻や相談役とされていた。ヌマ王は古代ローマの祭儀と暦を定めた人物として知られ、ヌマ王にそれらの知識を与えたのがエージェリアだと言われている[5]。

このエージェリアに捧げられるようになったニンフェーオという噴水が、今日の噴水に繋がるものだとも考えられている。ニンフェーオとは初めは泉の上に設けられた小さなアーチのようなものだったと言われているが、後にモニュメント化していったため、豪華に装飾された洞窟や壮大な建物を指すようになったとされている[6]。

ニンフェーオは古代ローマ時代に町の中や貴族たちの住んでいた庭園の中など、さまざまな場所でさかんに造られた。このニンフに対する信仰や伝説は、ルネサンス以降のイタリアの貴族の庭園にも受け継がれていった。ニンフ信仰の起源は水が自然と湧き出る泉であったが、その後、人工的に敷設された水道の末端に設置された泉も信仰の対象になっていった[7]。

古代ローマ時代に噴水の技術は大きく進歩する。かの有名なアッピア水道を見ても分かるようにローマ人の水道敷設技術はたいへん優れていた。美しいアーチを描きながらローマへと続く水道橋は現在でも残っており、当時の技術の高さを伝えている[8]。そして、この水道橋から大量の水がローマへ引かれてきた。3世紀の初め頃、一日に100万キロリットル（10億リットル）の水が供給されていたと言われている。人口が約3倍となった1980年のローマへの水の供給量は、182万キロリットル（18億2000万リットル）である。すなわち一人あたりの水の供給量は、古代ローマの方が1.6倍ほど多かったことが分かる。このように古代ローマは多くの水であふれ、水の都と呼ばれるようになったのである[9]。

大量に引かれてきた水は、皇帝用、公共用、個人用に分けられた。皇帝用とは、皇帝の命令で建設された公共の建造物と、皇帝の住居や施設に使うためのものである。公共用とは、兵営や皇帝の命で造らせたものではない公共の建造物や泉、水飲み場である。個人用は一般市民が使用するものである。そして、それらの水の最終地点には貯水槽が設けられ、それに彫刻などを加えて設置し、美しく装飾する配慮がなされた。皇帝は己の力を誇示するため、末端の噴水を豪華で壮大に装飾した。それにより噴水は町のシンボルとなる建築となった。また、記念碑的な役割もあったとされ、当時の人々の生活に無くてはならないものとなっていった。

水道敷設の技術が向上したことにより、自然と沸き出る泉を水源としなくとも、町のどこでも噴水を造ることができるようになった。

その例としてイタリアのポンペイがあげられる。ポンペイでは邸宅を構えることが一種の権力の象徴になるということもあり、ポンペイに住んでいた貴族たちは競って邸宅を建設した。しかし、都市化が進むにつれて建築用地が狭くなり地価も上昇したため、住宅は広々とした構造を次第に失っていった。そのかわりに邸宅内を豪華に飾り立てるようになっていった[10]。装飾化が進んだ邸宅の中庭には木や花が美しく植えられた。また、水道が引かれ、大理石で噴水が造られた。さらに室内には大きな貯水器や水盤を造り、水をたたえた。それらに花を浮かべたり、魚や水鳥を飼ったりといった楽しみも行

っていたとされている。もちろん、これらの水盤にも立派な装飾がなされた。また、公共浴場も建てられ、そこには湯が張られた浴場だけでなく、水が張られた浴場やサウナまであったという。さらには、体育場と共にプールも設けられたとされている。町に水を引くことにより人々の生活は豊かになり、娯楽施設も設けられるようになったのである。水が人々の心をも潤し、文明の進歩に影響を及ぼしていたのである。

文献に記されていた、皇帝の命令によって造られた記念碑としての役割を持った噴水も、現在ほとんど存在しない。文献から存在していたことが分かる最古の噴水については諸説あり、曖昧な点が多く、本当に存在していたかどうか不確かなものであるが、現在、実際に目に見ることができる最古の噴水は、イタリアの円形闘技場コロッセオにある、メタ・スダンス（図1）である。ただし、土台部分が残っているのみで当時の姿はほとんど想像できないが、現存しているのは例外と言われるほど貴重なものである。

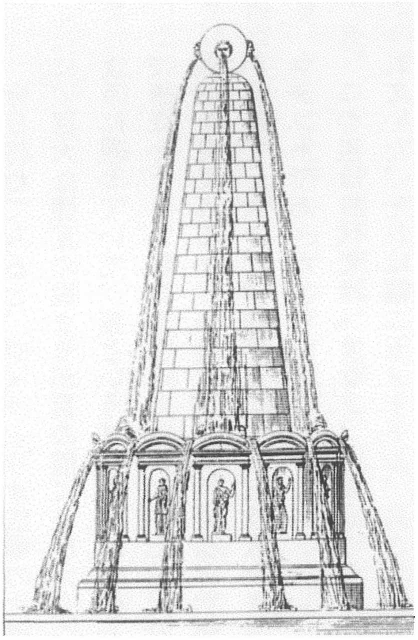

図1　メタ・スダンス

（『ローマの泉の物語』竹山博英著　p. 25）

他に現存する最古の噴水と言われているものとして、古代のラガッシュで発見されたものがある。この噴水は固い岩を切り抜いた幾多の水盤から成り立っており、それぞれの水盤は階段状となって川まで流れ着いている。水は一つの水盤から他の水盤へと順に水路を流れ、最も低いものは、レリーフ状の二頭の獅子で装飾されているものであるとされている[11]。これは紀元前約3000年頃のものであるとされ、この噴水が最も古いという説もあるが、現存する部分が少ないため明確には言えないとされている。噴水の起源も諸説あるが、このように最古の噴水についてもいくつか説が存在する。それは戦争などによって大部分が破壊されたり、自然と風化してしまったりしたことにより、古代に水が芸術品として扱われたという事実は、たった2、3の遺跡から想像しなければならないので、明らかにされていないものが多いためである。

それでは一部だけであるが、現在も見ることができるメタ・スダンスとは、どのような噴水であったのかを考察する。メタ・スダンスとは、かつて剣闘士たちがコロッセオで戦ったあとに、血で汚れた体を洗ったという伝説があるものである。メタとは競技場

に立てられた先の尖った円柱のことで、スダンスとは汗をかくという意味である。すなわちメタ・スダンスの原型は、巨大な円錐形の柱が中央に立てられており、そこから水が染み出るように流れ出していたものであった。そしてそのことから、メタ・スダンスという名前が付いたとされている[12]。

メタ・スダンスは1世紀のドミティニアヌス帝の時代に造られ、基部が直径15.9メートル、円錐の高さが17メートルあったと考えられている。コロッセオの脇にそびえ立つ、大きな塔のような泉であった。メタ・スダンスの構造は、水は頂上から噴き出し、その周りの大理石で造られた段階状の水盤を流れ落ちていくものであった。図2に示したものは、メタ・スダンスと同じ構造をした噴水である。それらの素材は、すべて大理石でできており、半円状のニッチや貝殻状の装飾がなされ、水は上部の小穴から、大きな四角形の水盤にしたたり落ちていった。また、上部にはバチカンで見られるような銅製の松笠がそれぞれ配されていたとされている[13]。図2を見ても分かるように、かなり細かい細工が施されていることから、当時の技術の高さや噴水へのこだわりを見ることができる。

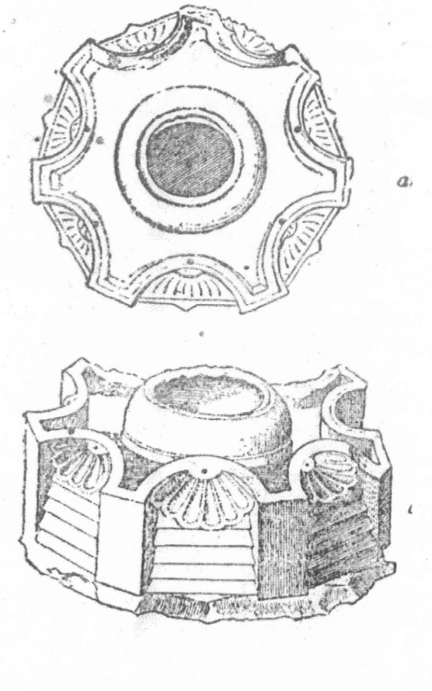

図２　ローマ時代の噴水

（『日時計とファウンテン』吉田享二著 p. 94）

また、メタ・スダンスは噴水というよりも泉と言ったほうが的確であると言える。というのは、この頃の概念として、まだ水を噴き上げるといった考えはなかったからである。水を高いところから低いところへと流し、その過程が行われるなかで装飾された石像があったものが一般的であった。

現在、土台部分しか見られないメタ・スダンスであるが、その円錐部分の遺跡は近代まで残っていた。しかし、ファシズム統治下の1936年に取り壊されてしまったのである。そして、最近の発掘で円錐の基部が発見され、かなり壮大な泉であったことが分かったのである[14]。このメタ・スダンスを始め、いたるところに造られていた古代の噴水を現在見ることができないのは非常に残念なことである。

■中世

時代が中世に移ったところで、噴水の文化は一度廃れてしまう。これはローマ市の例であるが、なぜ廃れてしまったかというと、大量の水を引いていた水道橋は猛威をふるっていた蛮族らに破壊され、使用できないものとなってしまったことが理由としてあげられる。それだけではなく、洪水や地震などの自然災害によって破損が進み、大きな被害をもたらしたことも使えなくなってしまった原因である。ただ、完全には壊れていなかったのため幾分の水量を引くことは可能であった。当時の権力者であった教皇は、補修の指示を出してはいたものの多額の補修費用が必要であったため、古代の水道の復旧はそれほど必要とされず、長らく放置されていたのである。

また、時代の移り変わりとともに水の需要が少なくなり、壊れた水道を引き直す必要性に駆られなかったことも原因である。ローマ人は好んで浴場を使っていたが、中世になりキリスト教の時代になると、裸で公衆の場に集うという習慣がなくなった。また、皇帝がナウマキアという模擬海戦[15]を行うこともなくなったため、大量の水が必要とされなくなっていったことも原因である。

そして、次第にローマは衰退していき、人口も流出していった。人々は、なんとか水道が機能している地域や川沿いに住むようになった。既に水上交通や染色、革のなめしに使われ、飲用には適さないであろうテヴェレ川の水も、再び飲用として使われるようになったほどであった。

このようにして水道が廃れていった当時に造られた噴水は、二種類のものがあった。一つは教会が所有するもので、もう一つは市場に造られたものである。ただしこれらは例外であり、例外を除いて記念碑的な噴水は造られることがなくなっていた。

一つめの教会に造られた噴水について考察していく。その噴水とは教会の中庭に設置されたカンタロと呼ばれる泉水である。当時、教会では参拝する前に体を清める習慣があったため、庭や教会の前にカンタロが置かれていた。そのカンタロで最も有名なものがサン・ピエトロ大聖堂[16]の中庭にあったピーニャの泉（図3）である。ピーニャ[17]とは、イタリア語で松笠という意味であり、この像も松笠のごつごつとした重なりが銅で力強く表現されているものである。

この巨大なピーニャは長らくサン・ピエトロ大聖堂の顔となっていたが、16世紀に解体されバチカンの中庭に移動した。そして、移動したピーニャは両脇に階段がある高い壇の上に置かれている。その壇の頂上には3世紀の彫刻が施された柱頭があり、それを

図３　ピーニャの泉に設置されていた巨大な松笠

（『ローマの泉の物語』竹山博英著　p. 15）

土台として緑青の吹いた巨大なピーニャが上に設置され、さらに高さを感じさせるものとして鎮座している。また、両脇には銅製の孔雀がピーニャを見守るように配置され、その下には老人の顔をした仮面がはめ込まれており、口から一筋の水を吹き出している。さらにこのピーニャは、ブラマンテが設計した巨大な壁龕にはめ込まれている。壁龕はかなり大きさがあるものであり、遠方から見るとピーニャの大きさはほとんど目立たないものとなっている。さらには黄土色の壁龕にピーニャの青緑色が映えて、美しい調和を作り出しているものであるとされている[18]。このように、実用性が好まれた中世の時代にも、かなり豪華で巨大な噴水が展開されていた例もある。

また、教会に設置されたもので一番古いものはイタリアのシチリア島にある、モンリアーレの僧院噴水（図4）である。それは大理石の美しい柱で取り囲まれており、それらの足下には浅い水盤が設置されている。水は、その柱の上部に置かれている怪獣の口から静かに流れ落ちており、強い太陽の光とロマネスク式の柱との調和は見事で、見るものを虜にしてしまうほどであるとされている。

また、北方のドイツには、ザインの噴水（図5）がある。ドイツにはカール大帝（742-814）時代から噴水があったとされているが、このザインの噴水は13世紀頃のものである。構

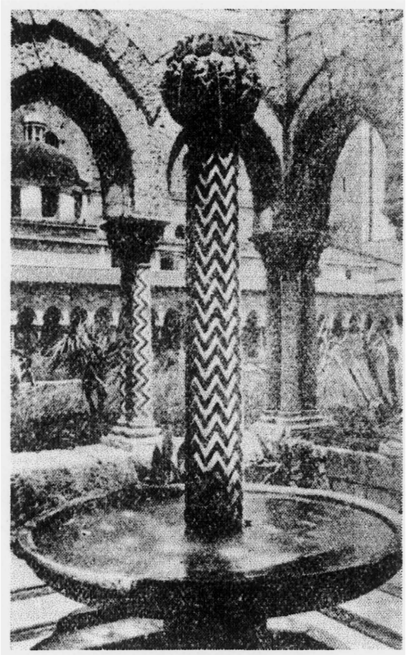

図4　モンリアーレの僧院噴水

（『日時計とファウンテン』吉田享二著　p. 94）

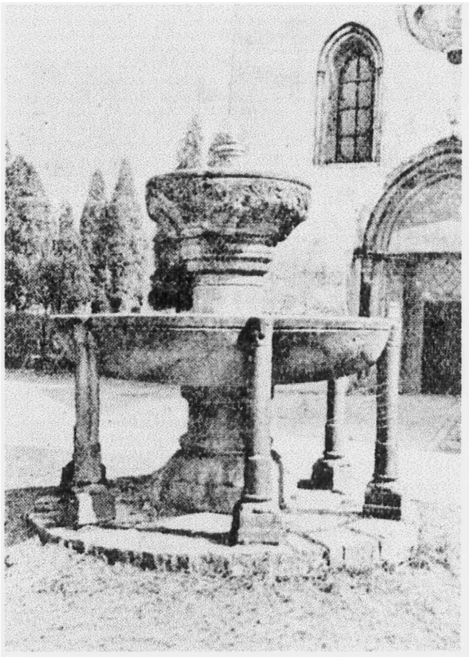

図5　ザインの噴水

（『日時計とファウンテン』吉田享二著　p. 94）

造は6つの玄武岩から成っており、浅い水盤が造られている。水盤は二段になっており、その上部の水盤の中央には、イタリアで見られたピーニャの形をしたモニュメントがある。そして、下部の水盤は中央の太い柱で支えられており、その端に6本の細い支柱がある。太い柱と、下部の水盤はロマネスク時代の柱をそのまま流用したものであり、上部の水盤を後に付け足したと言われている。

もう一つの市場に造られた噴水とは、教会に置かれたものとまったく性質が異なるものであった。主に生活用水として使用され、飲用、家畜の飲用、洗濯用、防火用などに使われていた。

市場噴水の有名なものとして、ドイツ北部のハルツ山麓の山間に存在する小さな都市、ゴスラーにある噴水がある。様式は、前に述べたザインの噴水と同じロマネスク式のものであるが、より水が汲みやすい形をしていたとされている。

また、中世の時代に造られていた庭園は、世界規模で見ても、キリスト教の修道院、すなわち教会で造られた庭園と、イスラム教国の造った3種類のサラセン式庭園ぐらいであるとされている。これらの庭園には噴水が設置され、重要な要素として存在している。

教会に造られた庭園は、薬草や野菜、果樹などが栽培される実用的なものであり、こ

れが後に四方を壁に囲まれた回廊式庭園へと変遷していく。壁面には壁画が描かれ、庭園は2本の直線が直角に交わる園路が造られ、正方形か長方形に区切られていた。その区画に植樹したり、園路の交差するところに簡単な噴水や水盤、井戸を置いたりした。これらは修道院式庭園と呼ばれており、主にイタリアで発達した。また、フランスやイギリスでは騎士たちが城郭庭園を造った。初期の城郭には庭園がなかったが、13世紀頃になり貴族らが囲まれた城壁内に植物や噴水を用いた整形式の庭園を造っていった。15世紀からは規模も次第に大きくなり、城の外側にも庭園が造られるようになった。

サラセン式庭園とは、大意でイスラム教徒であるサラセン人によって、彼らの文化と征服した国々の文化とを融合させ、造り上げた庭園のことである。地上の楽園をイメージし、庭園を造ったとされている。以下、3 種類の庭園の特徴を記している。

・ペルシア-サラセン式庭園

7 世紀初頭に現在のイランであるペルシアを征服したときに造られた庭園である。小さな庭園では、長方形の庭が直角に交わる園路で 4 つに分けられており、その園路に沿ってカナールと呼ばれる水路が設置されている。その園路の交差するところには、池や小屋などが置かれている。大きな庭園は、前述の小さな庭園をたくさん連ねたものである。

・スペイン-サラセン式庭園

7 世紀にスペインを征服したときに造られた庭園であり、特徴としてパティオという中庭が設置されている。詳しくは第三章のスペイン式庭園の項目で述べている。

・インド-サラセン式庭園

10 世紀にインドを征服したときに造られた庭園である。先に述べたペルシア-サラセン式庭園と同じく整形式の庭園で、四方を城壁に囲ませるデザインであった。平坦なものや、階段状のものがあり、四方向に走る直線の水路や整形された植栽などが多用された。タージ＝マハールの庭園がこの様式で造られている。

このように中世では、大規模な噴水はあまり造られなくなったものの、小さな規模では造られ続けていたのである。

■ゴシック様式

キリスト教と共に広まりをみせたゴシック様式の時代に造られた噴水の大きな特徴は、水盤を持たないことと水の流れを装飾的にせず、上から下へと流れるシンプルなもので

図６　シェーナー・ブルンネン

あったことである。水の流れと同様に噴水の外観もあまり装飾的なものではなく、多くの石材で八角形を造ったり、大きな丸い水槽の中央に石で造った角柱を立てたりしたものであった。ある噴水は角柱にたくさんの装飾を施しており、構造上、水中に沈む部分であっても、装飾は同じ水準で造られており、当時の建築家のこだわりが感じられるところである。

これらの噴水は、ドイツやフランスに多く存在している。その代表的なものは、ドイツのニュルンベルクにあるシェーナー・ブルンネン（図6）である。シェーナー・ブルンネンとは、ドイツ語で「美しい泉」という意味を持ち、この噴水はゴシック建築の代表作と言っていいほどゴシック様式が色濃く表現されている建築物である。シェーナー・ブルンネンには言い伝えがあり、この噴水の格子に継ぎ目のない「金の指輪」と呼ばれる真鍮製のリングが掛かっており、これを回すと幸運に恵まれると言われている[19]。装飾は非常に派手であるが、この噴水での水の扱われ方というと、豪華に装飾されてい

る上部からではなく、下部の排水溝から流れており、それも細く水が流れ出ている程度のものであるところが特徴的である。

そしてヨーロッパがゴシック様式に染まり、しばらく経った後、ローマに偉大な建築家、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニが登場する。彼がめざましい活躍をすることで噴水の存在が大きく変わるのである。その彼の活躍は第二章で考察する。

中世の時代は、古代ローマ時代のように華やかな噴水芸術は見られなかった。本来、噴水に装飾するというのは非実用的なことであるため、幾分か装飾されたとしても実用的な見方からは脱却できず、噴水の飛躍的な発展はなかった。そしてルネッサンス時代が到来し、実用的であらねばならないという考え方が打破され、噴水は再び装飾化されていくことになる。

■ルネッサンス時代

ルネッサンス時代では、ロマネスク時代に見られた水盤が復活した。ロマネスク時代にあったものよりも、よりいっそう装飾化され、水盤が強調されるようになった。水盤を復活させた最初のものはイタリアのグッビオにある噴水である。二つの水盤が重ねられており、その下部のものは大きく深いもので中世の面影を残している。そうして水盤は進化していき、水の流れ方も形を変えた。ロマネスク時代の水盤は、2、3個の口から水が流出していたことに対して、ルネッサンス時代のものは、その口自体を持たず水盤の端を扇状にし、水を溢れさせるようにさせた。そうすることで水は幕のように流れ落ち、たいへん美しいものであった。しかしこれは、実用的という点から考えると、広い幅で水が流れ落ちてくるため使いづらいとされていた。さらに多くの水が必要となるので効率が悪く、その大量の水を流す排水装置も必要となり、多額の費用が必要であった。しかし、これらの困難を克服してまでも、人々は噴水を装飾することにこだわり、次々に噴水を造り上げていったのである。

今日、私たちが思い浮かべる噴水として、ギリシア神話に出てくる神々が彫刻として噴水の中央に設置されているものを想像するかもしれない。そのような噴水は、ルネッサンス時代に復活した水盤が次第に進化、複雑化した結果なのである。ルネッサンス時代末期に、これらの元となる大きな彫刻と噴水が一緒に設置される作品が生まれ、水の存在よりも装飾が目立つようになってきたのである。

その流れに至った噴水の例として、イタリアのヴィテルボにある教会の噴水がある。

これは1633年に造られたものであり、鱗の模様した円錐状の影像の上部から、水を幾本も筋として流れさせ、その水を受けた水盤から、さらに4つの口から水が流れ出しているというものである。さらに、水盤の下部は菊花状の鋳造がなされていた[20]。大小の水盤が二段に重ねられ、その水盤には金属製の装飾がほどこされるという、かなり手の込んだ噴水であった。

そして、水盤の彫刻による装飾はさらに進み、幾何学的な形にとらわれることがなくなっていった。例えば、水盤の上に乗っている怪獣の彫刻があるとすると、その彫刻と水盤は一体となり、その怪獣の口から水が流れ出て、水盤はその水を受け止めるためだけの装飾となっていたのである。このような作品が次々と造られていき、さまざまな形態をもつようになり、噴水そのものの規模も徐々に拡大していった。

そして、彫刻をふんだんに使った最初の噴水は、シチリア島にあるイタリア本土に一番近い都市メッシーナにあるもので、1547年に造られたモントルゾーリのオリオンの噴水である。高さは約8メートルあり、これまでに見られなかったほど多くの彫刻が用いられている。それまで水盤を支えているものは丸い柱や角柱といった簡単なものであったが、この噴水の水盤はたくさんの人物の彫刻で支えられており、完成した当時の人々の感動は凄まじいものであったに違いない。また、水槽の表面はレリーフで飾られ、その角にはすべて彫刻像があり、全体を見ると美しい曲線を見ることができるように設計されている。水槽の上に彫刻像を設置することは、今までの実用的な噴水では考えられなかったが、この噴水では多くの彫刻が水槽の上に設置されている。水もかなり豊富に使われており、それぞれがさまざまな動きを持ち、美しい流れを生み出している。

オリオンの噴水を制作したモントルゾーリはミケランジェロを尊敬していたため、ミケランジェロの作風に似た彫像が多い。また、このモチーフが選ばれた理由として、神話ではオリオンによってメッシーナの町が創られたことに由来している。メッシーナには同時期にモントルゾーリによって制作された噴水が多数あり、当時、噴水の需要が多くあったことがうかがえる。

ルネッサンス時代に入り、実用的なものを重要視していた市場の噴水も変化してきた。もはや、教会や市場を区別する必要がなくなったほどである。その極みに達した噴水として、イタリアのボローニャとフィレンツェにあるネプチューンの噴水がある。当時、彫刻を多用する噴水のモチーフとして最も多く用いられていたのがネプチューンであり、多くの噴水が造られた。ボローニャとフィレンツェのどちらも、ジャンボローニャによ

って造られたもので、彼は当時、噴水彫刻家として最も有名であった。ボローニャにあるネプチューンの噴水は、1564年から6年に造られたもので、水盤はかなり大きくなり複雑な装飾がなされていた。水の流れ方も複雑化し、噴き出す口も多くなったため非常に豪華であった。フィレンツェのネプチューンの噴水は、ボローニャのものよりも更に彫刻が強調された造りになっている。それは、中央に巨大なネプチューン像が無意味に立てられるほどである。その周囲は垂直に水が噴き出していて、彫刻と噴水との関係性がない。水槽の周りに立つ彫刻もいくつかあるが、それらは独立して立っているだけで、噴水として意味を成す彫刻と識別してよいか迷うほどである。

こうしてルネッサンス時代の噴水は、実用的なものからの脱却に始まり極端な彫刻化が進んだため、水流の美しさを考慮しない造りになっていったが、彫刻の技術の発展に貢献した。このようなイタリア式の噴水は、瞬く間にイタリア近辺の国々に広まり、彫刻がメインとなった噴水が多く造られていった。しかし同時期のドイツでは、イタリアのような噴水の彫刻化は起こらず、ゴシック時代の形式を保ったシンプルな形をしたものが造られ続けていた。

図7　チロルにある噴水

(『日時計とファウンテン』吉田享二著　p.122)

ルネッサンス時代の彫刻化した噴水を造るイタリアの文化と、ゴシック時代を保った噴水を造るドイツの文化とが混じり合った土地では、両方のバランスがうまくとれている調和した噴水が誕生した（図7)。それはオーストリアとイタリアにまたがるアルプス山脈東部の地域[21]にあるチロルで生まれた。水槽にはレリーフがほどこされ、その水槽の中央に人の形をした彫刻が立ち、それらが水盤を支えている。さらにその上にも人の形をした小さな彫刻が立ち、同じように水盤を支えている。華美でもなく簡素すぎもしないバランスが保たれた噴水であり、流れる水量も上部の水盤から四方向に放物線を描いて流れ落ちる程度で、彫刻で造られた噴水のバランスを崩さない工夫がなされている。

これらの装飾化が進んだ噴水は、多くが町中の道や広場、庭園の中庭に造られ、人々の目に触れることの多いものであった。そして、人々に噴水は実用品ではなく、芸術品

であるという認識を芽生えさせることとなったのである。

■ バロック時代

バロック時代に入ってもルネッサンス時代に起こった噴水の彫刻化は続いており、その傾向はより強くなった。自由な風潮が生かされ、さらに彫刻は華美になり、水との調和は重要視されなくなった。特にローマでその傾向は強く、15世紀から教皇シクトゥス5世によって水道の復興がなされ、再び大量の水を引くことが可能になり、たくさんの噴水が町中に造られるきっかけとなった。

図8　プラトリーノの山荘から西園へ移された農夫の噴水

(『図説　ヨーロッパの庭と公園』岡崎文彬著　p. 39)

バロック時代の特徴が表れている噴水としてボボリ園にある農夫の噴水があげられる（図8)。これは葡萄酒を作るために葡萄を採取し、それを大きな樽に入れている一瞬を彫刻化したものである。水は男が抱える小さな樽から、下に置かれた大きな樽に細く弱く流れ出している程度で、噴水と呼ぶには躊躇してしまいそうな作品である。これほどにも彫刻化は進み、噴水は水の芸術という性質を失っていったのである。

ルネッサンス時代には水盤が復活したことは前述のとおりであるが、それはバロック時代にも引き継がれた。そして水盤もより彫刻化された。また、ルネッサンス時代は大きな水盤が一つだけあるものが多かったが、バロック時代になり、いくつもの大小の水盤

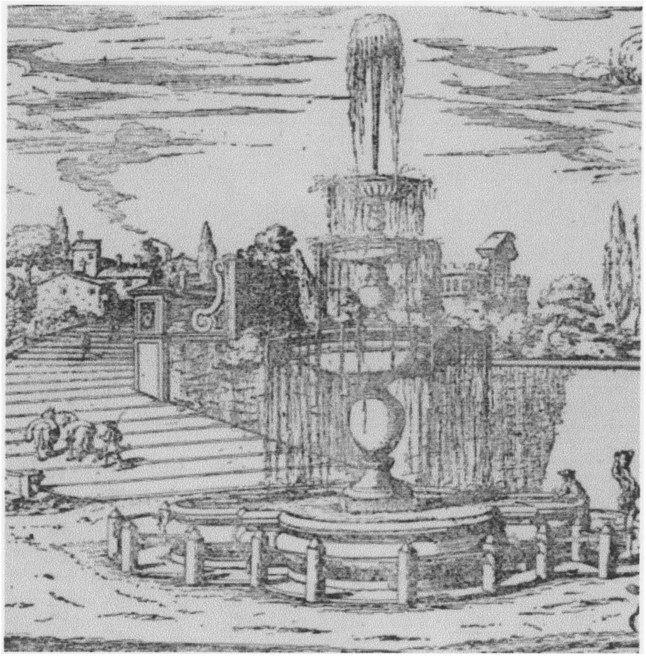

図9　フォンターナ・デッラ・パネタリア

(『日時計とファウンテン』吉田享二著　p.136)

を積み重ねるようになった。既に現存しない噴水であるが、フォンターナ・デッラ・パネタリア（図9）は4つの水盤を縦に重ねたものであり、全体を通して、その豪華さはもちろん、調和のとれたデザインが非常に美しいものであったとされている。

バロック時代の噴水は、ほぼルネッサンス時代のものの延長であるが、古代の遺跡を利用したものも生まれた。例えば、ローマのフハルネーゼ広場にある噴水の大きな水槽は、元はカラカラ浴場より発掘されたものである。また、フィレンツェのボルゴ・サン・ヤコボの壁泉の水盤も、古代ローマ時代の遺物をそのまま使用したものである[22]。このように遺跡をそのまま利用したり、新たに手を加えたりと工夫して噴水内に取り入れ、それを生かすことを好んでいたようである。もう一つは、古代ローマ時代に多く造られた、大きな壁泉が復活したことである。この大きな壁泉で一番古いものは、アクア・フェリスの壁泉で、４つの柱があり、その間にニッチが造られた。本来ニッチとは、壁を凹状にくりぬいたもので、室内でも使われ、花瓶や小物などを置く棚として設置されるものである。そのニッチにはモーゼの彫刻像が設置され、ニッチの下から大量の水が滝のように噴出しているものである。この技法はトレヴィの泉でも使われているものである。トレヴィの泉の彫刻や水盤は実に自由な形をしているが、調和の取れたデザインが保たれていることから、バロック時代の代表的な噴水であり、最も優れたものであると

言える。このトレヴィの泉については、第二章で詳しく考察する。

こうして、イタリアで噴水芸術は成熟期を迎えた。このイタリア風の噴水は、宮殿の庭園で取り入れられるようになった。また、近隣の外国、特にイタリアと親交の深かった国々で採用され、数多くの噴水が造られていったのである。

また、フランスでも彫刻化した噴水は数多く造られた。ナポレオン・ボナパルトが皇帝となり、パリの街を整備した際に町中に26個の噴水が設置され、フランス市民の生活に潤いを与えたのである。さらにナポレオン3世の時代になってもパリの街は改造され続けた。それに伴って、噴水もより多く設置された。代表的な噴水として、サン・ミッシェルの噴水がある。大きさは幅15メートル、高さ26メートルもあるかなり壮大なもので、大きな柱が立ち、彫刻像が設置されている足下の岩から水が流れている。この噴水は街の中に交差している道路の角に設置されており、都市を飾るものとなっている。現在でもこの噴水の前で恋人たちが待ち合わせをするなど、街の顔としての役割を持ち続けている。このような街角に造られた噴水はパリ以外にもローマやミュンヘンなどにも造られていった。

■近代

近代に入ると、各家庭などへの水道の普及により、より実用性がなくなった噴水は、次第に規模を収縮し、華美な彫刻も設置されなくなっていった。そして、水を美しくみせる芸術としての役割を果たすように変化していくことになる。

以前は勢いよく噴き出していた水も、静かに漂う美しさを取り上げられるようになった。静かな水を扱った噴水の例として、ダルムシュタットのロシア教会の前にある噴水があげられる。それは四角く浅い池であり、その一辺は柱が立てられており、その他の周囲は低い壁で囲まれている。その池の底には模様が彫られており、雲や緑をその水面に映し、波紋を起こして、静かに自然の変化を表現している。また、自然美を生かし、細い水流を静かに水面に落とすことで、水の美しさを表現したものもある。このように、噴水はシンプルなものや、自然そのものの動きを取り入れるものに変化していったのである。

バロック時代のような壮大さを持たせず、単純に流れる水の美しさを表現することを追求するようになったことで、19世紀以降の噴水芸術が彩られていくことになるのである。

20世紀に入ると、水道の末端にモニュメント的な噴水や、大掛かりな彫刻像を使った噴水などはますます敬遠され、実用的であり、シンプルな形のものが好まれるようになった。また、大きな戦争が世界各地で勃発し、その当時の権力者の力を示すため、その意向に沿った大規模な都市計画がなされた。その対象となった噴水も、芸術家のアイディアが生かされないものが多く造られていった。

■現代

現代においては、噴水はよりさまざまな形をするようになっている。

現在、世界一の高さを噴出することができる噴水は、スイスのレマン湖にあるジェドーというものである。毎秒500リットルの水を時速200kmの速さで、140mの高さまで噴き上げることができる。この噴水は、2003年以降、約20万人が死亡したとされるダルフールの惨状[23]に国際社会の目を向けさせるという意味を持っている。

また、室内でも楽しめる小さなものもインテリア商品として販売されており、噴水は個人で手軽に楽しむ時代になったとも言える。

さらに水は、ただ流したり、噴き出したりするだけではなくなった。ウォーター・スクリーンという技法は、水を空間に霧状に噴出し、それをスクリーンに見立ててレーザー光線で立体映像を映し出すものである。また、水のカーテンという技法は、高い位置に水を通すパイプを設置し、そのパイプに一列に多くの穴を均等に開け、その穴からコンピューター制御により水を下へ落とし、文字や絵を見せるものである。これらのものは、噴水メーカーが新しい噴水として提案しているもので、実際に商業施設に設置されたり、イベントで使用されたりしている。水はあらゆる形に姿を変え、現代の私たちの心も癒してくれているのである。

時代に沿って姿を変えてきた噴水であるが、それらの歴史をたどることで、どのようなことが分かるだろうか。神々の存在を重要視していた時代では、水や噴水も大切に扱われていた。これらの思想から誕生した噴水は、都市を彩る存在として長らく重要視されてきた。一時的に水道の普及や戦争などにより軽視される時代もあったが、古代よりヨーロッパの人々の生活や心に馴染み深いものであった噴水は、現代でも廃れることなく、ヨーロッパの街並を美しく装飾している。

第二章　イタリアの噴水思想

ローマは永遠の都と呼ばれ、古くから人々に愛されてきた町である。歴史、文化、宗教の中心地であったことから、いにしえより栄え、今日に至っている。また、水の都、芸術の都であり、あらゆる分野の歴史がたいへん古い町である。第一章でも述べたようにローマが水の都と呼ばれる所以となったのは、ローマ人の水道敷設技術がたいへん優れており、山から一度に多くの水を引くことができたため、水が人々の生活の一部となっていったことがあげられる。そして、その水を信仰する伝統と相まって、水が引かれたところには噴水が設けられ、水が湧き出る周囲には美しい装飾がなされたのである。それが噴水の始まりであるとされている。水を大量に引いたローマには必然的に数多くの噴水が存在したため、それらの噴水は現在までにも残り、今でも水の都と呼ばれ続けているのである。

その古代からの水の都、ローマを美しく再構築し、現在に残るさまざまな噴水を手がけた人物がいた。その人物の名は、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニである。

「ベルニーニはローマのために生まれ、ローマはベルニーニのためにつくられた」と言われるほど、彼はローマに深く関係している人物である。ベルニーニは多くの著名な作品や噴水を造り、人々を驚かせ、感動させ続けた。それは水を愛するローマ人の、イタリアの人々の心に刻まれ、今日の彼らの思想に繋がっているのではないかと考えられる。

それではまず、ベルニーニという人物について考察する。

■ジャン・ロレンツォ・ベルニーニについて

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ（1598～1680）は、イタリアのバロック時代を代表する芸術家である。彫刻家ピエトロ・ベルニーニの息子としてナポリに生まれ、8歳の頃にピエトロが彫刻家として実力を試すという目的のため、家族でローマに移り住んだ。ピエトロはフィレンツェの出身であったため、同郷の貴族であるボルゲーゼ家から依頼を受けていた。ピエトロは、技術を磨かせ、目を養わせるために、息子を自らの仕事場によく連れて行っていた。その折に、息子ベルニーニはボルゲーゼ家出身の教皇であるパウロス1世に才能を買われた。ボルゲーゼ家の館に招かれ、芸術に触れる機会を与えてもらったり、バチカンに自由に出入りでき、ミケランジェロなどの作品を観る機会を

得たりもした。そして、息子ベルニーニは彫刻家としての才能を開花させたのである。

彼は彫刻の他に絵画の才能にも長けており、当時から非常に人気のあった人物であった。サン・ピエトロ大聖堂の建築主任であるマデルノに師事して彫刻を学び、こちらの才能も花開かせる。また、フランス王ルイ14世に招かれ、ルーヴル宮殿の改築にも携わった。実に多くの広場や宮殿を手がけており、当時の彼の人気がうかがい知れる。

特筆すべきこととして、ベルニーニが生きた時代はバロック時代の噴水の彫刻化が最盛期を向かえていた頃である。ベルニーニの彫刻家としての才能と相まって、ローマの街は豪華な彫刻像で構成された噴水で装飾されていった。以下、バロック時代を創り上げ時代の特徴を色濃く表している、彼の残した著名な噴水について考察していく。

■ バルカッチャの泉

図10　バルカッチャの泉

バルカッチャの泉（図10）は、ローマのスペイン広場にある噴水である。スペイン広場の東側には、トリニタ・デイ・モンティ教会に通じるトリニタ・デイ・モンティ階段、通称スペイン階段という大きな階段がある。これは、映画『ローマの休日』で、オードリー・ヘップバーン扮するアン王女がジェラートを食べていたことでたいへん有名にな

った場所である。そして、その階段の下にあるのがバルカッチャの泉である。

バルカッチャの泉は一艘の船がモチーフになっている。バルカッチャとは、ぼろ船という意味があり、道路が水面に見立てられ、その水面に船が沈んでいくように表現されている。しかし、その船内にも水が満ちており、ぼろ船というよりは、難破船と表現する方が適切かもしれない。船内に満ちた水はそこに留まらず一定の方向に流れており、水面に動きを出し、臨場感が増す見せ方をしている。

この泉は1627年から9年にかけて造られたのだが、新しい時代の到来を告げるものであったとされている。それは、この泉が装飾性を前面に出しているからである。大きな船がモチーフとされていることも装飾性が高いと言えるが、水の見せ方においても同じことが言えるのである。水盤が低い位置に造られているのは水の圧力が足りなかったためであるが、多くの水が瞬時に目に入る効果がある。これは船内に満ちた大量の水についても言えることである。すなわち、この泉は広い水面が自然とすぐに目に入ってくるように構成されており、水の豊かさが実感できるようになっていると言える[24]。

また、バルカッチャの泉はベルニーニの考えがよく表されているとされている。以下に記すのはベルニーニ自身の言葉である。「よき建築家は、泉を作ったり、水を扱う時、それが流れたり、落ちたりする様を、容易に見られるようにしなければならない。水を見るのは心躍ることだから、それを難しくしたり阻害するのは、その作品から最も楽しい長所を奪う」[25]と。まさに、バルカッチャの泉の構造そのものであると言える。

バルカッチャの泉について、このような説もある。この泉はベルニーニの父であるピエトロが作成したと言われているが、息子ベルニーニの考えや特色が色濃く出ているため、息子の協力があったと考えられている。しかし、どちらかが単独で造ったものなのか、もしくは合作であるのか、詳しくはまだ明らかになっていない。しかし、作品に水を従わせているのではなく、水があってこそ作品が存在しているように造られているこの泉は、息子ベルニーニの協力なしには完成し得なかったのではないかと考えられる。

このバルカッチャの泉が発表されたことから、ますます噴水の装飾性が高まっていくことになるため、この作品は、噴水の彫刻化の先駆けとなるものであると位置づけられている。

■四大河の泉

四大河の泉（図11）もベルニーニの代表作品と呼べるものである。この作品はローマ

図 11　四大河の泉

のナヴォーナ広場にあり、かなりの大きさがあるため、この広場は四大河の泉のためのものと言っても過言ではないだろう。

四大河の泉の構成は、頂上に高さ21メートルもある、表面に象形文字が彫られたオベリスクが立てられており、その下には台座が設けられて、その台座の上に川を象徴した4人の人物の彫刻像があり、その下には川と関係のある動物の彫刻像が配置され、それらを大きな水盤で取り囲んでいるというものである。

水盤は円形をしており、そこに自然の岩をイメージした石が置かれている。そして、オベリスクの4つの角に合わせて、4体の川の神が設置されている。その4つの川というのは、ドナウ川、ガンジス川、ナイル川、ラプラタ川である。それぞれ、ヨーロッパ大陸、アジア大陸、アフリカ大陸、アメリカ大陸を表している。その下に設置された動物の像は、ライオンや馬が岩の割れ目におり、蛇やイルカ、アルマジロ、また、ヤシの木などの植物もある。川の神々の彫刻像は古代から、濃いひげをたくわえた、たくましい

壮年の男性と決まっており、地面に寝そべり肘をついて、上半身を起こす姿で表現されていた。しかしベルニーニは、その姿は踏襲したものの、不自然に体をねじらせており、このあたりにバロック時代の自由な表現を見ることができる。これらはオベリスクを見上げるという設定のもと造られたが、単調にならないよう動きを出すために、このような表現がなされたとされている。

また、オベリスクの頂点にはオリーブをくわえた鳩が置かれている。これは銅でできており、かつては金箔が貼られていた。この鳩は1.7メートルもあるが、下から見上げてもそのような大きさは感じないほどオベリスクはかなり存在感がある。キリスト教では鳩は聖霊の象徴であり、オリーブをくわえたものは平和の象徴となっている。また、ベルニーニにこの四大河の泉の設計を依頼した、パンフィーリ家の紋章も鳩であった。そして四大河の泉は世界を表現している。このことから、キリスト教の平安が世界に反映するようにという意味が込められているのである。

さらに、四大河の泉は寓話的解釈も可能であるという説もある。当時はエジプトの象形文字によって神の神秘が記されているとされ、それはすべての宗教に共通する重要なものだとされていた。オベリスクは、神の神秘を記した聖なる記念碑であった。

寓話的解釈によると、岩の割れ目にいるライオンは太陽と聖なる力の象徴で、豊饒をもたらす。馬は、川の馬であり古代エジプトの神セトと同一視される。それは破壊の象徴であり、旱魃をもたらす。この二頭は生と死が共存する洞窟で争っているが、頂上の鳩が生命の象徴である水を通じて善を勝利させるというものである[26]。このように、さまざまな見方ができるこの作品は、ベルニーニの才能を強く感じることができるものである。

このようなベルニーニの温故知新かつ独創的なアイディアはローマの人々に受け入れられた。そしてローマの街は美しく装飾されていき、ベルニーニの人気はますます高まっていったのである。

■トレヴィの泉

他にもイタリアには著名な噴水が多く存在する。トレヴィの泉（図12）はその一つだと言えるだろう。トレヴィの泉は、古代ローマ時代に皇帝であったアウグストゥスが水道を引き、その末端として存在していたが、幾度もの修復が加えられた。そして、18世紀に場所を変え、現在の位置に造られた。そのときに多くの芸術家が関わったが、その

図12　トレヴィの泉

中にベルニーニも加わっていた。

ベルニーニが修復を請け負う前には、ジャーコモ・デッラ・ポルタが業務を請け負っており、水盤を造り上げた。水盤の大きさは、縦9メートル、横13.5メートルのもので、その上の壁に3つの噴出口があるといった簡単な造りのものであった。その後、1640年に教皇ウルバヌス8世がベルニーニに委託し、大規模な改修工事がなされた。ベルニーニは泉の方向と、水盤を大きな半円状に変えた。そして、その水盤に彫刻像を置く円形の台を設置した。教皇の死亡によりベルニーニの計画は中断してしまい、次の教皇の命令で四大河の泉を造ることになったため、次の芸術家に改修の権利は移り変わってしまったが、現在でもベルニーニが手がけた部分を見ることが可能である。

その後の教皇らは、あらゆる建築家の案を募集しては改修を繰り返したが、資金不足や事故などで、なかなか完成にまで至らず、完成を見ぬ間に教皇や建築家が亡くなっていった。現在のトレヴィの泉は、教皇クレメンス12世がニコーラ・サルヴィの案を採用したものであるが、二人とも完成を見る前に他界している。

このように多くの時間と人々の案を集結させて造られたトレヴィの泉は、実に多くの意味が込められた造りをしており、バロック時代の特徴をよく表している。

まず目を引く大きな水盤は、横幅が約50メートルもある。水泳競技で使用するプール

とほぼ同じ大きさであることを考えると、その圧倒的な大きさが分かる。その水盤の上に自然の岩をイメージした大きな台座があり、泉の後ろにある直線で構成されたポーリ宮殿とも違和感を生み出していない。そしてその岩の上にはさまざまな彫像が置かれているが、どの彫像も力強く、動的である。その中でも、一番目を引く、中央に設置されたオケアノスの彫像は5.8メートルもある。オケアノスは、ギリシャ神話に出てくる水の神であり、地球が円形だと考えられていた当時、その大地を取り囲む大河、または海であるとされていた。地上のすべての河川や泉の水は、このオケアノスの水が地下を通って地上に現れたものとされ、すべての水の源であると考えられていた[27]。そのオケアノスは、貝殻でできた馬車を海馬に引かせ、前へと突き進んでくる姿で表現されている。向かって右側の海馬は従順に馬車を引いているが、左側の海馬は前足を宙に上げ、首を大きく曲げて暴れているように見える。これらの海馬たちは、右側のものは穏やかな海を、左側のものは嵐の海を象徴していると言われている。そして、それらの海馬を率いるのがトリトーンであり、通常、トリトーンはポセイドンに付き従う姿で描かれるが、トレヴィの泉では、オケアノスの海馬を率いているとされている。右側のトリトーンは右手で馬のたてがみをつかみ、左手でホラ貝の笛を吹いているように表されている。左側のトリトーンは右側のものよりも若く、左手を馬の口に、右手を胴体にあて、馬を押さえ付けようとしているように見える。トリトーンと海馬はオケアノスの斜め前方に配置され、正面から見ると扇状に広がっており、オケアノスが全面にせり出すような効果が考えられているとされている[28]。

バロック時代の特徴をそのまま生かした迫力のある彫刻像が目を引くトレヴィの泉であるが、実際は18世紀になって完成した。「18世紀に制作された最も17世紀的な泉」と評されるトレヴィの泉が完成した時代は、既にロココ芸術に発展していたのである。また、ベルニーニが造った四大河の泉が完成してから100年以上が経っており、バロック時代の建築物は古くさく感じられたに違いない。しかし、ベルニーニが四大河の泉を作成する際に使用した、自然の岩をイメージした台座が取り入れられていたり、植物の彫刻が置かれたりなど、バロック時代のさまざまな技法が模倣されている。このような点からトレヴィの泉はローマの最盛期の傑作とされているのである。

このようにベルニーニは当時の権力者である教皇に取り入りながらも、自分のスタイルは失わずに制作活動をした。ベルニーニは同じ時代を生きた、どの芸術家よりも自由

に生き､表現を縛られることなく制作し続けたのである｡そして大きな時代の波を創り、後世に多大な影響を与えた。その思想は現在のローマの街でも美しく輝き、これからも永遠に守られていくに違いない。

第三章　ヨーロッパの宮殿の庭園における噴水

元来、ヨーロッパの人々は自然を人間の力で支配しようと考え、庭園を造ったとされている。自然を超えた洗練や芸術的技巧、観念性などが追及されるようになったものがヨーロッパの庭園である。この考え方も時代によって変遷していくが、人間の考え方が自然にとらわれなくなったということが、庭園が造られる第一歩である。

庭園の考え方は中世以降より生まれたもので、設置された場所や目的としては、城内であったり、柵で囲んだところに造った鑑賞用や、修道院の中庭に造り、薬草園として用いたり、自宅の側に設置した菜園などもある。

庭園は自然を支配しようという考えから生まれたと述べたが、これは人々が快適な生活を送ることができる環境を整えたいという思いを持っていたためであるとも言える。当然、快適な環境に対する考え方は、各国、各時代で違いがあるため、それが今日の各国の庭園様式の特徴や違いとなって表れていると言える。

次に、大きな流れを生んだ各国の庭園様式を考察していく。それらの庭園は一種の様式となり、現代に至るまでの多大な影響を与えたものである。その様式とは、イタリア式庭園、フランス式庭園、イギリス式庭園である。これらが持つ要素は、それぞれ違うものもあるが、それぞれ密接に関係している。このような大きな庭園様式が造られていった時代でも、各国で小さな庭園は造られており、独特の庭園様式を確立させていた。このことについても後に検討する。そして、これらの庭園の中での水や噴水の扱われ方はどのようであったか考察していく。

■各国の庭園の様式、著名な宮殿

■イタリア式庭園

イタリア式庭園は、さまざまな形式のある庭園様式の中で最も古い。フランスにある広大なヴェルサイユ宮殿も、今日私たちが家庭で楽しむ“イングリッシュガーデン”も、

このイタリア式庭園の考えが生まれなければ、存在していなかったかもしれないものなのである。そのような意味では様式のある庭園の中において、代表的なものであり、すべてのルーツであると言える。

庭園の中でもイタリア式庭園が代表的であるとされている所以は、建築の特色が強いことがあげられる。建築が特徴的であるのは、イタリアが建築技術で他国よりも秀でていたことが大きな理由である。また、地理的に考察すると、地質の特性として石材の産出量が豊富であったことや、イタリアには斜面が多く、その斜面を生かした美しい階段状の滝を造ったことなどがある。特に階段状の滝は、地中海性気候[29]の影響による強い日差しから涼を得るための水を効率的に流すにはたいへん都合がよく、それらが多用されたことで一つの様式となり得るまで完成度が高くなったと言える。

イタリア式庭園の様式は、幾何学式であり、テラス式庭園とも呼ばれている。発達した時期は14世紀から16世紀であり、主にイタリア郊外の別荘で多く見られた[30]。

イタリア式庭園の特徴として、多種多様の技法が使われていることがあげられる。その特徴とは、デザインが幾何学的である点、数段のテラスから構成されている点、家などの建築物がテラスの上段の中心部に建設されている点、非常に眺めがよい点がある。

・デザインが幾何学的である点

幾何学的なデザインは、庭園にはビスタ（通景線）と呼ばれる軸となる線が設定されており、かつ、庭園が四角形に区切られているため、結果的に幾何学模様となることからである。

・数段のテラスから構成されている点

数段のテラスから構成されるのは、先にも述べたように地理的にイタリアには傾斜地が多く、そこを庭園の敷地とすることが多かったため、切土、盛土した結果、そこがテラスになったためである。

・家などの建築物がテラスの上段の中心部に住宅が建設されている点

高い位置に住宅が設置されるのは、家や建築物の水はけを良くするためで、そのためには当然、建物は低い土地よりも、高い土地にある方が良いことからである。

・非常に眺めがよい点

眺望が素晴らしいことは、見晴らしが良い土地に立地していることもあげられるが、幾壇にも重なっているテラスの頂上には、視線を遮るものが無いことからである。そのため当然見晴らしがよく、美しい景色を存分に楽しむことができるのである。この技法

はベルベデーレ（美しき眺め）と呼ばれている。

その他にイタリア式庭園で使われている特徴的な庭園技法の例をいくつかあげる。ジャルディーノ・セグレト（隠れ庭）は、庭園内にある小庭園のことで、中世の頃、壁で囲まれていた庭園の延長として考えられている。ジャルディーノ・セグレトからもよい見晴らしが得られ、周囲の風景を眺めることができる。さらに見晴し台や塔を造り、景色を楽しめるようにしている。ボスコは、庭園の一部を占める樹林のことで、夏には日差しを避ける木陰ができ、快適な空間を造り出すことができる。樹林は対称的に配置されており、幾何学的な造園がなされている。グロットとは、洞窟を意味し、夏には涼しく快適な空間を生むものである。カスケード（階段滝）は、土地の高低差を利用して造られた階段状の滝である。その他、設置されたものとして、列植、噴水、ノット（結び目）花壇、立体迷路、彫刻などがある。

また、イタリア式庭園には、必ずと言っていいほど水を利用した建築物が設置された。フランスのヴェルサイユ宮殿に見られる噴水のデザインや、これを応用した大仕掛けの彫刻などには及ばないが、豊富な水量を使った、さまざまな演出がなされていることが特徴である。

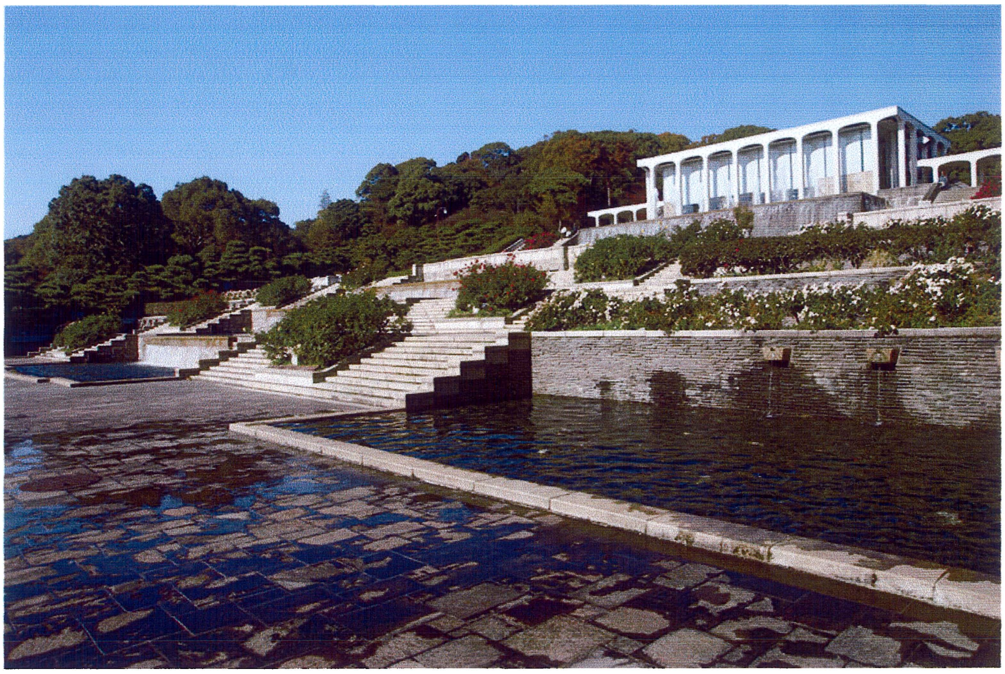

図 13　須磨離宮公園のカスケード

庭園の中の大量の水を利用した建築物として、池があげられる。庭園のどこかには必ず池が設置されたほど、イタリア式庭園にとって重要とされているものである。その極

端な例として、庭園の大半を池が占めるような庭も存在していたとされている。その池には、噴水が設置されるものが多かったようであるが、噴水は池ほど重要視されていなかった。また、壁泉もほとんどのイタリア式庭園に設置されている特徴的なものである。壁泉とは、落ち口を水平にして水を落下させ、水の幕をつくるような人工の滝の一種である[31]。

他に水を利用した特徴的な建築物として、階段状の滝であるカスケードがある。前にも考察したように、斜面を利用した階段に水を流すという技法である。傾斜が多い地形ならではである技法で、階段状のモニュメントに水が上から流れ落ちてくる様子は、まさに滝のように見え、庭園の中に整えられた自然が造られた印象を受ける。現代でも、このカスケード式の噴水は、あらゆるところで見られ、もちろん日本にも存在する。それほどイタリア式庭園は定番化したものであるといえるのである。

このようなイタリア式庭園が生まれるきっかけとなったのは、15世紀の初頭に、都市郊外に建てられた別荘での生活が、都市に住む人々に重要視されるようになったことにある。都会での暮らしは人口過密により狭く、空気は汚れ、悪臭や騒音などの公害が発生し、人々に影響を及ぼしていた。そのような生活から逃れ、広々とした土地や、美しい空気、豊かで静かな自然がある郊外で暮らすことが健康によいとし、都市に住む人々に別荘での暮らしを推奨した人物がいた。その人物の名は、レオン・バッチスタ・アルベルティ[32]である。彼はレオナルド・ダ・ヴィンチと同じ時代を生き、ダ・ヴィンチと並ぶ天才とされている。そのアルベルティが1430年代に、著書『家族論』の中で別荘における生活の素晴らしさ、余暇を別荘で暮らすことを提唱し、人々の感心が都会から郊外へと向けられていったのである。

1452年、アルベルティは『建築論』を著す。この書物は、古代ローマ時代の建築家ウィトルウィウスの『建築十書』を再編したものである。古代から当時のルネサンス期までの建築が、さまざまな方向から考察されており、現在の西洋建築に多大な影響を与えている。なお、アルベルティは亡くなる直前まで、この『建築論』に手を入れていた。その後、この著書は1485年に刊行された。この書物の中で別荘についても述べられており、庭園の基礎となる考え方や、別荘と風景をマッチングさせるための敷地選定や家屋計画、庭園の作庭方法などが書かれている。

この『建築論』の中では、敷地は田園風景を眺めることができる丘の斜面が最適とされ、屋内には新鮮な空気、太陽、そよ風を入れることが重要であるとした。部屋の壁に

風景画を描き、花輪やつる草の絵のモザイクを壁や床に描いて装飾することの必要性を説いた。また、家屋は風景を味わえるように建設しなければならないとし、都市や海、平原や丘の風景を楽しむことは欠かせないことだとされている。

庭園は本来、壁に囲まれた空間であって、これは略奪などから守る最もよい手段である。しかし、庭園が丘の斜面に造られることで、壁を超えた庭園の外に広がる風景の美しさを味わうことができるようになった。こうした観念は昔からの庭園との大きな違いである。

庭園では、太陽の光と風の涼しさを十分に味わえることが基本であるとし、庭園内の樹木は規則正しく植えるようにした。また、柱廊を壁沿いに造ったり、小道を常緑樹で縁取りしたり、小川を造ったり、道を舗装した部分には風景などの絵が描かれるようにしたり定義した[33]。このようにアルベルティは別荘や庭園で、いかにして自然を楽しむかを述べている。庭園の具体的なデザインなどは記されてはいないが、このような思想から庭園が誕生していくことになったのである。

図14　百噴水

（『図説　ヨーロッパの庭と公園』岡崎文彬著　p. 39）

イタリア式庭園の代表的な庭園として、ティヴォリにあるエステ家別荘がある。そこにある庭園、ヴィッラ・デステは後期ルネッサンス時代に造られたもので、古代ローマ時代をイメージした噴水が500あまり造られている。著名な噴水として、オルガンの噴

水や百噴水（図14）などがある。オルガンの噴水は、水力を使って音を奏でることができる噴水であり、かつ、高い位置に溜めた水をパイプに通し、10m以上水を吹き上げることにも成功したため、当時は噴水史上の革命と言われた噴水である。現在でも定時になるとオルガンの演奏を聴くことができる。百噴水とは、直線の園路の壁面に噴水が設置されているものであり、壁面にはエステ家の紋章である鷲の彫刻や、さまざまな動物が彫刻されており、それらの口から水が噴出しているものである。

■フランス式庭園

フランス式庭園の技術が開花したフランスの地は、地理的にどのような特徴があるかを考察していく。権力者の影響もさることながら、当時のフランスには庭園を造ることに適した地形や素材がたくさんあったことも庭園文化が根付いた理由の一つである。

フランスは、ヨーロッパ大陸の西にあり、西は太平洋、南は地中海に面している。また、セーヌ川、ローヌ川、ガロン川といった大きな河川が流れていることも特徴である。豊富な水と肥沃な大地に恵まれたフランスは古来より栄えており、その庭園も非常に華やかなもので、パリにある庭園は名園として今なお親しまれている。

フランスの地質は品質の良い石材を多く産出し、北部では花崗岩が採れる。オーヴェルニュ地方には火山があるため、特殊な着色軽石や溶岩があり、それらは壁や装飾に用いられる。また、南部にも良質の石材を産出する土地があり、石材にはたいへん恵まれている国であると言える。

フランス式庭園の特徴として、桁違いに広大である点、軸線に沿って左右対称である点、ボスケ（小庭園）がある点、水を静的に扱う点がある。

・桁違いに広大である点

フランス式庭園は、平坦な土地を生かした広大なものが多い。この様式の代表作であるヴェルサイユ宮殿の総面積が約800ヘクタールあり、道の全長が約20キロメートルあることからも、かなりの規模であったことが分かるであろう。イタリア式庭園の特徴として、傾斜を利用し庭園の外を眺めることができる点があげられるが、フランス式庭園は地平線が見えたとしても、それは庭園内であり庭園の外を眺めることは不可能である。これはイタリア式庭園と比べて大きな違いであると言える。この広々とした庭園は実に堂々としている。これは、他のどの国にも見られない特徴であり、このあたりにフランスの御国柄が出ているとも言える。

・軸線に沿って左右対称である点

館を中心とした軸線を設け、それを対称に庭園が構成されているため美しい左右対称となる。また、館に近いほど細部にこだわった造りとなっている。イタリア式庭園と比較してみると、イタリア式庭園は建築様式によって協調性を持たせ、それを庭園の美しさとしていた。しかしフランス式庭園は、庭園が左右対称である点を重要視し、平面幾何学式庭園を目指している。

・ボスケ（小庭園）がある点

ボスケとは元来、庭園内の森を指す。そのボスケの中に、さらにボスケを造っていくうちに、次第に森の中の小さな庭園をボスケと呼ぶようになったとされている。

・水を静的に扱う点

これはイタリア式庭園に造られた噴水との対比である。イタリア式庭園にあった噴水は、傾斜が利用されたということもあり上から下へ水が流れ落ちていた。しかしフランス式庭園は、このような上下に動きのある噴水を造らず平面にこだわったのである。そのため、庭園内には幾何学的な池が多く造られた。また、それは水量の不足が理由という説もあるとされている。

上下の運動をしない噴水ばかりとは言え、そのような噴水が全く造られなかった訳ではない。イタリア式庭園よりは噴水の規模が小さくなり、上下の運動をする噴水が多く造られなかったという意味である。実際に現在のヴェルサイユ宮殿には、立派な噴水は存在している。17世紀にも、水柱の直径2.7メートル、高さ24.6メートルのオベリスク状の噴水が存在していたとされている。他にも、マルシー作の巨人の像は8メートルの高さにある像の口から水が噴出していたと言われている。

次にフランス式庭園の歴史を考察する。16世紀になり、ヨーロッパにイタリアのルネサンス様式の庭園が広まっていった。フランスの人々もその様式を模倣し、フランス国内にも庭園が造られるようになっていった。そして、フランスで造園を盛んにさせたのがフランソワ1世である。フランソワ1世はイタリアから天才と呼ばれていた造園家を招き、フランスでも有能とされていた造園家らに技術を伝えさせ、フランス式庭園を造るため、技術の向上に力を注いだ。後の偉大な造園家でフランス式庭園の様式を完成させるアンドレ・ル・ノートルが活躍し、フランス式庭園の黄金期がもたらされるまで約200年の時間を必要とするが、それまで間、フランスの造園技術を高め続けるきっかけを作ったのがフランソワ1世なのである。彼が建築させた著名な庭園として、フォンテーヌ

ブローの庭園[34]、シャンボール城の庭園などがある。これらの庭園に影響を受け、後にルイ14世も当時の有名な造園家であったル・ノートルに宮廷に庭園を造らせた。その後の王たちも庭園に興味を持ち、かつ、庭園を造り上げる力も併せ持っていた。さらに、王らには審美眼があったためフランスの造園技術はますます向上していったのである。

17世紀になり、アンドレ・ル・ノートルが登場する。彼は1613年にパリに生まれ、父ジャン・ル・ノートルもトゥイルリー宮殿の造園家であった。若い頃は、絵画や彫刻にも興味を抱いていたが、父が造園家であったため、その後を継いだ。そのことがきっかけとなり、息子ル・ノートルは造園家としての才能を花開かせることになる。ル・ノートルが一番初めに手がけたのは、ヴォー・ル・ヴィコント城[35]の庭園である。この庭園の特徴は、斜面を生かすなど地形的な変化に富み、立体的な空間を表現することを主としたイタリア式庭園とは異なり、寒冷高湿で平坦な地形という自然条件を生かして、平らな見通し線を縦横に配置し、開かれた軸線構成が展開されている。どこまでも続く広大な土地に、幾何学的に整形された樹林の壁や大運河、噴水や水路で装飾されたまっすぐな道が敷地の果てまで延びている。さらに擁壁や階段、カスケードといった人工の高低差が加えられて、印象的な造形を生んでいる。また、錯視や寒色の使用による望遠効果を用いて軸線を一点に集中させ、その軸線の終点と山の頂にある城館が交わるようにさせ、幻想的な空間をつくりだしている。ヴォー・ル・ヴィコント城の庭園を造り、確立したこれらの手法によって17世紀のフランス式庭園の展開の方向が定まったとされている[36]。この庭の出来は非常に素晴らしく、依頼主であったルイ14世を大変満足させたため、ル・ノートルはヴェルサイユ宮殿の庭園造りを任されることになる。すなわち、この庭園が造られなければヴェルサイユ宮殿も存在しなかったかもしれないのである。

このようなフランス式庭園の代表作と言えば、やはりヴェルサイユ宮殿である。ヴェルサイユ宮殿の登場によってフランス国内だけでなく、ヨーロッパ、それより遠い国々にも多くの影響を与えた。そして現在でも、その輝きを失っていない。このヴェルサイユ宮殿の水や噴水の扱われ方はどのようなものであったかについて考察する。

まず、ヴェルサイユ宮殿の噴水の大きな特徴として、複雑な仕掛けのものが多いことがあげられる。噴水に置かれた彫刻は一つの群像として構成されており、水の噴き出し方は一カ所からだけではなく、あらゆるところから噴出するように造られている。しかし、それらは一つの集合した構成の作品に見ることができ、その点が優れているとされる。イタリア式庭園の場合は一つの彫刻に勢力を注ぎ込む場合が多いが、フランス式庭

園の場合は、全体のまとまりを大切にしている。また、噴水の周りに置かれた像の素材は銅や鉛でできたものが多い。その他、イタリア式庭園の特徴として見られたカスケードは、イタリアほどの大きな規模のものはないが、小型のものが設置され名残を残していたようである。

ヴェルサイユ宮殿は当時から現在まで全く姿を変えなかった訳ではなく、取り壊されては新しく建てられたり、設計にたびたび変更を加えられたりしてきた。それは水を使用した建築物も例外ではなかった。例えば1665年、主要な庭園内の道路を決定し、フランチニ兄弟がラシスの洞窟を完成させたが1686年に取り壊された。他に、アラビア模様の花壇は円形の噴水に変えられたり、草花のリボンの花壇は噴水に変わったりしたとされている。

また、水の広場にはルイ14世の意見に基づいて二つの大きな池が掘られ、それらには大理石の淵がつけられた。その池の周りには、当時、名を馳せていた他国の芸術家に造らせた傑作と呼べるほどの銅像が並べられた。池の隅にはフランスの川を象徴するモニュメントが置かれたり、その間には子どもを連れたニンフの像が置かれたりしていた。

18世紀の中頃には、水の劇場が完成する。その他に、三の噴水と言われる劇場も設置された。これらは、それぞれ異なった高さで造られ、最も下部にあるものは八角形をしており、それらには16もの噴水口があった。その上部のものは巨大なアーチを成しており、一番上にあるものからは一筋の水が高く噴き上げていたとされている。1669年には龍の噴水のある広場が改造され、これを中心として水の園路や三角の噴水が造られた。水の園路はクロード・バローの考案で、14基の小噴水を園路の両側に配置し、子どもらが花や果実を載せた皿を支えている像を配置したものである。三角の噴水は、フランソア・ギラルドンによって造られたもので水の園路の入口を飾っている。その他、水浴するダイアナの像もギラルドンの名作として有名である[37]。このように庭園内には、さまざまな形の噴水や水を使った建築物が造られ、歴代の国王を喜ばせていたことがうかがえる。その後にも数々の噴水が造られた。1672年から5年にセレスとフローラの噴水、1672年に鏡の池、1673年から7年にバッカスの噴水、1674年から83年に皇室の島、1675年から6年にアンセラダスの噴水が次々と造られていったとされている。

また、ヴェルサイユ宮殿には、ルイ14世の三つの意図が込められている。その意図とは、「水なき地に水を引く」、「貴族を従わせる」、「民衆の心をつかむ」の三つである。これらの重要視した意図の中で、水が含まれていることに注目することができるであろう。

まず、「貴族を従わせる」というのは、ルイ14世の経験から生まれたものである。その経験とは、ルイ14世が10歳のときに起こったフロンドの乱で貴族たちに命を脅かされたことである。彼はこの体験を一生忘れず、貴族をヴェルサイユに強制移住させた。ラトナの噴水には、ギリシア神話の中で最も柔和とされる女神ラトナが、村人に泥を投げつけられながらも息子の太陽神アポロンを守っている銅像がある。ラトナの足下にいる蛙やトカゲの像は、神の怒りに触れた村人たちがそれらに変えられた姿である。ラトナとアポロンが表しているのは、フロンドの乱の時ルイ14世を守った母と幼い彼自身であり、蛙やトカゲに変えられた村人は貴族たちを表している。このラトナの噴水で、ルイ14世は自分に反抗をする者は決して許さないということを示しているのである。また、太陽神アポロンの噴水は、アポロンが天馬に引かれて海の中から姿を現し、天に駆け上ろうとしている姿を模った噴水であり、アポロンはルイ14世自身をあらわし、彼が天空から地上のすべてのものを従わせるということを表している[38]。

「民衆の心をつかむ」ために、ルイ14世は民衆の誰もがヴェルサイユ宮殿に入ることを許可した。さらに、民衆に庭園の見方を教える『王の庭園鑑賞法』というガイドブックも発行した。その中には「ラトナの噴水の手前で一休みして、ラトナ、周りにある彫刻をみよ。王の散歩道、アポロンの噴水、その向こうの運河を見渡そう」と書かれている。民衆は、ガイドブックに従って庭園を鑑賞することで、貴族と自然を圧倒した王の偉大さを刷り込まれていったのである。夏になると、ヴェルサイユ宮殿では毎晩のように祭典が催され、訪れた民衆はバレエや舞劇に酔いしれたとされている[39]。このようにルイ14世は庭園を利用し、専制政治を押し進めていったのである。

「水なき地に水を引く」ことは、ヴェルサイユ宮殿を建設するにあたって非常に骨の折れる行程であった。ヴェルサイユ近郊には水を引いてくることが可能な高地がなく、約10キロメートル離れたセーヌ川からヴェルサイユまで、古代ローマ時代に造られた水道橋を模倣し、水を引くことに成功した。これは当時、いかに水を引くことが困難であったかが分かる逸話である。それと同様に水を引くということで、フランス国王の権力がフランス国民だけでなく、世界に誇示できたということが分かる。そして引かれてきた水は巨大な貯水槽に溜められた。このことにより、水なき地に美しい広大な池や噴水を造ることに成功し、自然を超える力を示すことができたのである。

■イギリス式庭園

18世紀になり、人々はフランス式庭園に疑問を抱き始める。そのきっかけとなったのが、グランド・ツアーと呼ばれる、イギリス人ジェントルマンたちの世界旅行である。昔からのライバルであるイギリスとフランスは、ヨーロッパ大陸での覇権とアメリカ大陸などの植民地支配権をめぐり、各地で抗争を繰りひろげていた。それは1世紀以上に渡り、断続的に続いた戦争だった。その時代のフランスは、ルイ14世の絶対王政の絶頂期から革命による旧体制の崩壊に向けて長い坂を下りつつあった。一方、名誉革命後のイギリスは王権に制限を課し、内閣を中心とする議会民主主義の形を整えつつあった。議会では宮廷貴族に対して、地方の大地主ジェントルマンの政治的力の伸長がめざましいものであった。

大地主たちは、戦争のための重税によって経済的に衰弱した中小地主から土地を買収して領地を次々に拡大し、そこに豪華な館と庭園を造らせた。これがイギリス国内では風景庭園、ヨーロッパ大陸ではイギリス式庭園と呼ばれる庭園である。

ところで、軍事・経済的にはヨーロッパの中で一、二を争う強国に成長したイギリスも、文化的にはいまだに後進意識をぬぐい去ることができていなかった。そのため、地主ジェントルマンたちの子弟は、ギリシアやローマの古典文化の教養を身につけるべく、文化の先進地フランス、とくにイタリアに遊学した。グランド・ツアーと言われたその長期の大陸旅行は、一種のジェントルマンの通過儀礼となって大流行したのである[40]。こうして、イギリスの人々の興味、関心は古典へと移行していった。そして国力が衰退し、勢いをなくしたフランスの庭園様式は否定され、新しく台頭してきたイギリスの庭園様式が主流となっていったのである。

人々は、自然を人間の力で完璧に整え、権力を誇示する道具として利用してきた時代に徐々に嫌悪感を抱き始めたのである。そして、自然を自然らしい姿のまま受け入れるべきであるという思考に移り変わっていき、イギリス式庭園の考えが生まれたのである。当時は既に世界交流が盛んであった時代であり、イギリス式庭園の思想はアジアの自然観に大きく影響されたものであることは明らかである。

フランス式庭園からイギリス式庭園の考えが完成するまでには、以下の人物が関わっている。以下、代表的な人物を紹介する。

・チャールズ・ブリッジマン（1690-1738）

彼の大きな功績は、イギリス式庭園の特徴である左右非対称の庭園を造ったことと、

ハハー（Ha-ha）という庭園技法を考案したことである。ハハーとは、堀で庭とその外との境界を設定したものである。こうすることで視界をさえぎるものはなくなり、周囲の自然との一体感が生まれた。これはのちに風景式庭園の考えへとつながる重要な技法であった。

・ウィリアム・ケント（1685-1748）

イタリアの風景を取り込んだ造園を目指した人物である。「自然は直線を嫌う」という言葉が有名で、これはフランス式庭園の技法である、まっすぐな道路や生垣を批判している。彼が提案した技法として、曲線の遠路や小川、丘を利用した土地の起伏といった自然風景を意識したものを取り込むことや、橋、神殿、廃墟などの建築物を設置することなどがある。これらは、イタリアの風景画を再現しようとしたことによる。景観を支配せず、調和を大切にした庭園造りをしたことが特徴である。

・ランスロット・ブラウン（1716-1783）

前述のケントはイタリアの風景画をイメージしていたが、彼はイタリアの風景そのものを庭園に取り込んだ。林や小川、池や芝生などを設置し、装飾性を持たせなかった。設計を任された土地を見て、ブラウンは「この土地には可能性（Capability）がある」と言うことが口癖であったため、ケイパビリティ・ブラウンと呼ばれていた。

・ハンフリー・レプトン（1752-1818）

レプトンは主に改修を行った造園家である。基本的にブラウンと同じ技法を使用しているが、ブラウンが否定した花壇などの幾何学的な部分を取り入れ、変化に富む庭園造りを目指した。水彩画が得意であったため、完成前と完成後のデザインを風景画として依頼主に示したことで有名である。これらは表紙が赤い皮で綴じられていたことから『レッド・ブック』と呼ばれ、現存しているものはわずかしかないが、実際には400冊ほどあったと言われている。風景式庭園（Landscape-Gardening）という言葉は、彼が作ったものである。

ここでイギリス式庭園の特徴を考察する。イギリス式庭園は風景式庭園と呼ばれ、フランス式庭園のような平面幾何学的なものではなく、曲線を多用し、なだらかな起伏を要した自然風景のように設計された庭園であることが特徴である。これらの風景は、ジェントルマンたちがグランド・ツアーで目にした古代ローマの古典の風景が、イギリス式庭園の風景なのである。古代の理想的な自然は絵画のなかに描かれており、イギリスのジェントルマンたちは、その絵画と同じ風景を庭園の中に表現しようとしたのである。

このことは、風景式庭園を意味するランドスケープ・ガーデンが、風景画を意味するランドスケープ・ペインティングに対して作られた語であることからも分かる。

18世紀の人々は庭園を散策する際、古典文学や風景画に関する教養を通して、古典の理想的な自然の風景に思いを馳せていたのである。庭園の風景にはさまざまな詩や物語、あるいはそれらを題材にした絵画が絡み合っていたのである[41]。こうして彼らはイタリアの風景をイメージし、絵画を切り取ったような庭園を含んだ、すべての自然が一つの空間の中で存在することができる庭園造りを目標としたのである。

また、18世紀にイギリスで起こった産業革命も一つの要因である。産業革命によって貴族たちは生活の拠点を都市に移すようになっていった。都市での生活が増えると、自然に帰る場所として、庭園をより重要視するようになったのである。そして、より生き生きした庭園が望まれ、イギリス式庭園は自然風景さながらのものとなっていったのである。

初期のイギリス式庭園の中に噴水は設置されていた。イギリス式庭園は自然を生かす庭園であったため、建築家が力を十分に注げる建築物としても、噴水は重要視されたのである。1598年に造られたハンプトン・コートの噴水はピラミッド型をしているものや、洞穴の中で、さまざまな女神の彫刻に人魚から水をかけられているものなど、非常に特徴的な作品がある。しかし、自然風景の思考が高まっていくにつれ、人工的であるという理由から噴水もあまり設置されなくなり、庭園には、滝や川、湖など、自然に存在するものをイメージしたものが多く造られるようになっていったのである。

以上、大きな流れを生んだ3つの庭園様式と、そこに設置された噴水について考察した。このような流行が発生すると、それに乗るように近隣諸国でもそれらの様式が模倣される。そして模倣から、その国の特色を生かした庭園が造られるようになっていくのである。それらの中で大きな流れにはならなかったが、その国の独特な工夫がなされ、今日でも文化として残っているものがある。次よりそれらの国の噴水や水の使い方に特徴を持った庭園様式について考察する。

■スペイン式庭園

スペインは広大な国土を持っており、それぞれの地方で環境がかなり異なる。ピレネー山脈を隔てて北方から北西の海に面した地方は、高低差が少なく雨量が多い。中部の

大地や盆地は、夏期は非常に乾燥し、冬期は雪に包まれる。地中海に面する地方は温暖である。南方のアンダルシア州は、アフリカに近いこともあって亜熱帯であり、特にグラナダは常に暑い土地である。

地質は、北部に花崗岩、南部では石灰石が産出される。大理石は国内のあらゆるところで産出されるため、石造建築が一般的である。また、煉瓦が使用される地方もある。

スペイン式庭園にはパティオが設置されていることが特徴である。第一章でも述べたようにパティオは本来、イスラム文化圏で造られていたもので、サラセン式と言われている庭園様式の中の要素の一つである。7世紀頃、イベリア半島よりイスラム軍がヨーロッパ大陸に侵攻し、現在のスペイン領土は、ほぼイスラム軍の手に落ちた。その後、イスラム軍はイベリア半島の南方に追いやられたが、約500年もの間その地で勢力を張った。そして、今日でもスペインにはイスラム文化を彷彿とさせる建物や文化が残っており、スペイン式庭園のパティオも、その代表だと言える。

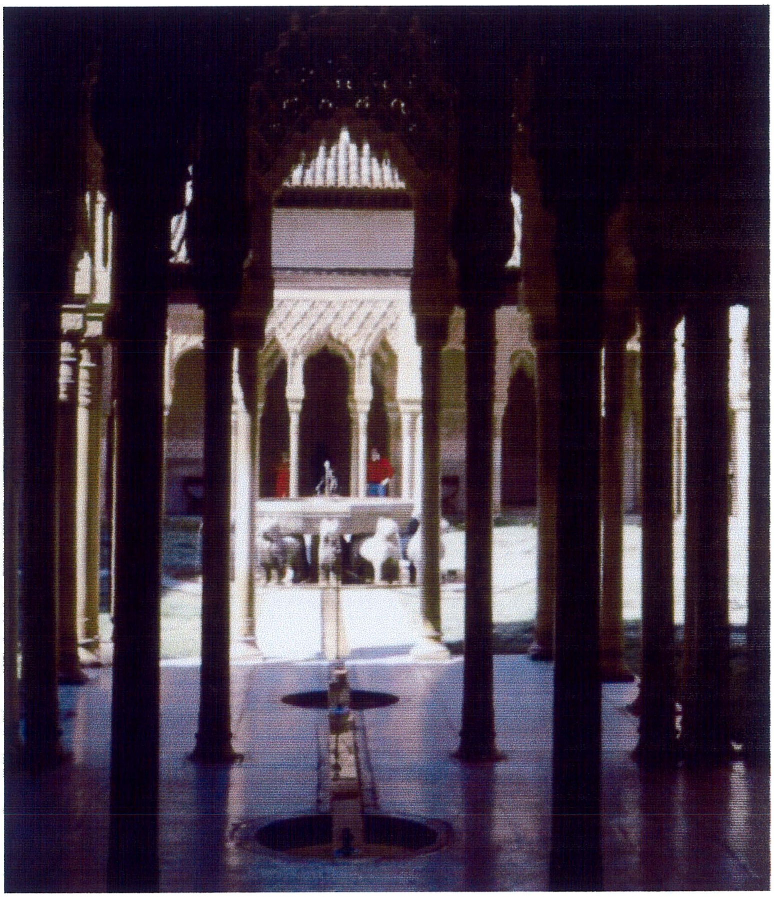

図 15　アルハンブラ宮殿の「ライオンのパティオ」

(『図説　ヨーロッパの庭と公園』岡崎文彬著　p. 3)

パティオとは中庭のことで、エドモンド・ド・アミシスは、「ガーデンにあらず、ルームにあらず、コートヤードにあらず」と表現し、パティオはこれらの中間に位置するものであって、一種の内庭や中庭であるとした[42]。このように何にも属さないパティオは、スペイン独特の建築物であることが分かる。

パティオはスペインの気候に非常に適応している。図15のようにパティオの四方には柱が取り囲むように立てられており、その柱は柱頭で一つにつながっている。その上部の面のおかげでパティオ内には常に陰ができ、日差しの強いスペインでも涼がとれるように工夫されている。これはスペイン国内にも見られる工夫で、道を狭くし、壁を高くすることで陰を作り、強烈な太陽の日差しをさえぎるようにできている。

そのパティオの中心には池や噴水、カナールが設置された。カナールとは小さな水路で、流れが演出されており、その水は他の噴水や池に流れ着いたり、樹木に注がれていたりする。そして、柱や床には色彩豊かなタイルが敷かれ、花壇が彩りを添えている。この造りで有名なのが、アルハンブラ宮殿やセビリアのアルカサールなどである。

パティオ内の池や噴水、花壇や彫刻などを配置する際の決まりなどは特に定まっておらず、そのパティオの所有者の意向が色濃く表されていた。例えば、噴水が噴き上げるものもあれば、上部に花壇を設け、その下部から水が流れ落ちるものもあった。パティオに植えられた植物も花だけでなく、レモンやオレンジ、オリーブといった果樹も植えられていた。このような形式にとらわれすぎないところに、スペインの御国柄が表れていると言える。

今日でこそ、このパティオはスペインらしい建物であると言えるが、このスペインらしさはイスラム文化圏の特徴が色濃く出ている。アルハンブラ宮殿を見ても分かるように、イスラム風の建築物が建てられている。砂漠の民であったイスラム教徒たちにとって水は大変貴重なものであり、水を豊富に庭園にたたえることで、権力を示したのである。

アルハンブラ宮殿のパティオにはスペインの特色がよく表れている。アルハンブラ宮殿はスペインの南方、グラナダにある。グラナダは非常に暑いことで有名であり、水の絶対量が少ない。その少ない水を利用し、噴水を造ることは、権力の象徴となったのである。

以上の考察により、庭園において噴水の存在する理由は、以下のことがあると考えら

れる。

第一に、水は自然物の代表だということである。古代より身近な存在であった水は人々の生活に根付いていた。また、古代からの水を神格化した思想や、すべての生物は海から誕生したという考え方もあることから、水は生活や生命にとって不可欠な存在で重要な要素であるため、庭園内に水を使った建築物や噴水を設置したと考えられる。

そして第二に、権力の象徴として利用されたことである。建築物の規模で、当時の権力者や依頼主の権威を示すことができた時代では、豪華な庭園そのものが力の象徴となり、人々を制圧することができた。自然は大いなる力を持ち、その自然を制約することで、自らの力を誇示したのである。これらのような考え方は、イタリア式庭園やフランス式庭園、特にフランス式庭園に顕著に見ることができる。

時は経ち、自然を支配することによって人間の力を誇示する時代は終わった。現代では、いかに自然と共存し、自然を守ることができるかを競い合う時代となった。何をもってすれば、自然を守ったことになるかは明確ではない。ただ言えることは、自然は人間を超越し、包み込んでしまうほどの偉大な力を持っている。人間は、とうてい自然を超えることは不可能なのである。それを踏まえた上で過去の噴水を見、これからの庭園に設置される噴水のあり方を考えていくべきである。そして、水という偉大な力を美しく輝かせるためには、噴水は庭園の中に必要不可欠なものであると考えられる。

おわりに

水は、昔から人々にとって身近であり、命あるものすべてに恵みを与える存在である。それと同様に、時には台風や嵐などに形を変えて、大きな力を持った恐ろしい存在となり、人々の命や生活にとって脅威となることもある。それは世界各国同じである。例えば中国では、氾濫が起こった黄河を治水することで権力を示した。これは、水を治めるという言葉の非常に深い意味である。そして、このような水に対する感謝や恐怖の念から、水が神格化され、信仰される考えが生まれたとされており、この考えは現在にも続いている。私たちが生きていくため重要な存在である水をたたえるために、庭園内や町中に水を使った建築物や噴水が設置されたと言える。

このように、自然を大切に扱う思想が存在すると同時に、はじめにでも述べた西洋思

想がみられることもある。それは第三章で考察した各国の庭園様式に言えることである。イタリア式庭園やフランス式庭園は自然を幾何学形態におさめようとしていたことから、自然を支配しようとする思想があったことは明確であるが、イギリス式庭園のように、自然はありのままの姿が美しいとされた時代でも、フランスとイギリスという敵対する国どうしの対立が背景にあり、当然、敵国と同じものは好まれないため、イギリス式庭園という考え方が生まれたとも言えるだろう。庭園に限らずこのような人間の身勝手により、新しい流行や考え方は生み出されてきたと言える。自然をありのままの姿で庭園に設置したとはいえ、“庭園”という箱の中におさめてしまうという時点で、自然を人間の力で支配しようという考え方が根底にあると言える。

しかし現在、ヨーロッパ諸国では環境問題に対し、さまざまな取り組みが熱心に行われていることは世界的によく知られている。この精神は古代から自然と共に暮らし、自然を神聖化してきた時代の思想が受け継がれてきたものだと考えられる。水を神聖化し、噴水を造ったことがきっかけとなり、その後噴水は時代に応じてさまざまな形に姿を変え、絶えず人々の生活や心に潤いを与えてきた。このように生活において密接な関係を築いたことも、噴水がヨーロッパの人々にとって重要視される所以であろう。また、それは庭園を造る際に、水が必ず取り入れられている点からも理解できる。

長い時の流れの中で、あらゆる思想が生まれては消えていく。その中の水に対する思想も同様に形を変えてきた。そして今日、ヨーロッパの人々の噴水や水に対する思想は、水を神格化した当時と同じくらいに自然への敬意が表れているものであると言えるのではないだろうか。

ヨーロッパの人々が町中で目にしている噴水は、生活の一部であると言える。そしてその噴水には、いにしえからの人々の思想が詰め込まれている。古代からの噴水を身近に感じられることで、噴水や造形物に対する愛情や、水や自然に対する感謝が生まれたのではないかと考えられる。そのことから、ヨーロッパの人々に自然を愛する思想が生まれてきたと言える。そして、心に刻み込まれた自然を重んじるこの思想は、これからも永遠に受け継がれてゆくものであると言える。

---

[1]『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.16、l.12-14
[2]『日時計とファウンテン』吉田享二著　p.88、l.12- p.89、l.1-10
[3]『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.16、l.6-10
[4]『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.16、l.14-15
[5]『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.17、l.2-6
[6]『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.17、l.7-10

7『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.18、l.15-16、 p.19、l.1-4
8「ローマは川沿いの町で、水には事欠かないと思える。だが実際にテヴェレ川を見ると、黄緑色に濁っていて、飲用に適するとはとうてい思えない。テヴェレ川には『黄金色のテヴェレ』という美しい呼称があるのだが、それは古来、濁った水を流してきた事実をも表している。」(『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.20、l.5-7) とあり、ローマ市民はローマ市が設立されてから約440年、決して飲用に適しているとは言えないテヴェレ川の水を飲んでいたとされる。
9『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.22、l.15-16-p.23、l.1-2
10『ポンペイ　古代の遺跡を再現』マリア・アントニエッタ・ロッツィ・ボナヴェン・トゥーラ著　p.8、l.9-13
11『日時計とファウンテン』吉田享二著　p.87、l.11- p.88、l.1-6
12『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.23、l.8-11
13『日時計とファウンテン』吉田享二著　p.93、l.12- p.94、l.1-11
14『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.23、l.12-15-p.24、l.1
15模擬海戦とは、ナウマキアと呼ばれる古代ローマのコロッセウムで開催された興行の一つで、闘技場に水を張り、歴史上の有名な海戦を再現したものをいう。(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』(http://ja.wikipedia.org/wiki/ナウマキア))
16「サン・ピエトロ教会はコンスタンティヌス帝がキリスト教を公認した後、聖ペトロの墓の上に建てた教会で、教会の中で最も権威のあるものである。かつてその前庭は回廊になっていて、中央に『天国の泉』とも呼ばれる『ピーニャの泉』があった。それは古代のブロンズ製の、大きな松笠の彫刻を中心にした泉だった。
『ピーニャの泉』は、八世紀の教皇ハドリアヌス一世 (在位七七二〜九五) の時代に整備されたと考えられている。教皇はテヴェレ川の右岸にあるヴァティカーノ (ヴァティカン) に水を供給していたトラヤーナ水道を修理し、水が来るようにしていたとされている。」(『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.29、l.8-14)
17ローマに続く街道の両脇には、笠松が植えられており、昔からイタリアの人々に馴染みの深いものであったようである。ピーニャの泉もそうであるが、松笠は、さまざまなモニュメントのモチーフとなっている。さらに一般家庭にも、このピーニャの置物が置かれていたりするようである。また、イタリアで見られる松笠の大きさは、日本で見られるものよりもかなり大きく、握りこぶし大の大きさがあり、かなり存在感がある。
18『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.30、l.2-9
19フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』(http://ja.wikipedia.org/wiki/ニュルンベルク)
20『日時計とファウンテン』吉田享二著　p.113、l.9-12
21フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』(http://ja.wikipedia.org/wiki/チロル)
22『欧州の庭園』戸野琢磨著　p.140、l.6-9
23ダルフール紛争は、スーダン西部のダルフール地方で、2009年現在も進行中の紛争。特に近年のものはダルフール地方の反政府勢力の反乱を契機に、スーダン政府軍とスーダン政府に支援されたアラブ系の「ジャンジャウィード」と呼ばれる民兵の反撃が、地域の非アラブ系住民の大規模な虐殺や村落の破壊に発展したものである。
この紛争で2003年2月の衝突以降、2006年2月時点での概算で18万人が既に殺害され、現在進行中の民族浄化の事例として広く記述されている。2004年6月3日の国連事務総長の公式統括 (bilan officiel) によれば、1956年の独立以来、1972年から1983年の11年間を除く期間に、200万人の死者、400万人の家を追われた者、60万人の難民が発生しているとされる。(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』(http://ja.wikipedia.org/wiki/ダルフール紛争))
24『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.107、l.5-9
25『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.110、l.1-3
26『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.124、l.13-16-p.125、l.1-3
27『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.182、l.8-10
28『ローマの泉の物語』竹山博英著　p.182、l.13-16-p.125、l.1-6
29「地中海性気候の特徴として、以下のことがあげられる。地中海沿岸をはじめとする中緯度の大陸西岸に分布しており、冬に一定の降雨があるが、夏は日ざしが強く乾燥する。土壌は石灰岩の風化によってできたテラロッサが広く分布し、乾燥に強いオリーブや、ブドウなどの果物、柑橘類などの栽培、牧畜が広く行われている。この気候区は温暖なことからリゾートとして発展し

ている場所も多く、乾燥する夏季を中心に世界各地から多くの人が訪れる。」（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（http://ja.wikipedia.org/wiki/地中海性気候））

[30]フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』(http://ja.wikipedia.org/wiki/イタリア式庭園)

[31]フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』(http://ja.wikipedia.org/wiki/壁泉)

[32]「レオン・バッティスタ・アルベルティ（Leon Battista Alberti、1404年2月14日 - 1472年4月25日）は、初期ルネサンスの人文主義者、建築理論家、建築家である。専攻分野は法学、古典学、数学、劇作、詩作であり、また絵画、彫刻については実作だけでなく理論の構築にも寄与する。音楽と運動競技にも秀で、両足を揃えた状態で人を飛び越したと伝えられる。
彼は多方面に才能を発揮し、ルネサンス期に理想とされた「万能の人」の最初の典型と言われた天才。確実に彼に帰属するとされる絵画、彫刻は現在のところ伝わっておらず、建築作品についても少数ではあるが、芸術理論は様々な分野で後世に影響を与えた。」（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（http://ja.wikipedia.org/wiki/レオン・バッティスタ・アルベルティ））

[33]フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』(http://ja.wikipedia.org/wiki/イタリア式庭園)

[34]「フランスに於ける十六世紀の庭園はフォンテンブローのそれが代表的のものである。之はフランソア一世によつて始められたもので、イタリー風に設計せられた。現在に於ては當時の俤を知る事は不可能であるが、ヅ・セルソーのプラン（一五七〇頃のもの）によると、それは極めて精密に設計せられたものである事が分る。廣大な花壇は飽く迄美しく、珍奇な形の小塔や庭亭は宮苑を巧みに飾つて居た」（『欧州の庭園』戸野琢磨著 p.61、l.3-6）とされ、華やかな庭園であったことがうかがえる。

[35]ヴォー＝ル＝ヴィコント城（Château de Vaux-le-Vicomte）は、フランスのセーヌ＝エ＝マルヌ県にある17世紀のバロック様式の城である。ルイ14世の大蔵卿ニコラ・フーケによって建てられた。フーケは当時最高の芸術家とされていた、建築家のル・ヴォー、画家のル・ブラン、造園家のル・ノートルを招いてこの城の建設させた。この城の出来は素晴らしく、ルイ14世の機嫌を損ねてしまった。そしてフーケは没落し、建設に関わった芸術家らは、そのままルイ14世によってヴェルサイユ宮殿の建設を担当させられることとなった。なお、この城は現在、個人所有されているものとして有名である。（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（http://ja.wikipedia.org/wiki/ヴォー＝ル＝ヴィコント城））

[36] フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』(http://ja.wikipedia.org/wiki/ヴォー＝ル＝ヴィコント城)

[37]『欧州の庭園』戸野琢磨著 p.72、l.7-10、p.73、l.6-11

[38]フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』(http://ja.wikipedia.org/wiki/ヴェルサイユ宮殿)

[39] フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』(http://ja.wikipedia.org/wiki/ヴェルサイユ宮殿)

[40]『イギリス風景庭園　水と緑と空の造形』田路貴浩著 p.20、上l.1-20、下l.1

[41]『イギリス風景庭園　水と緑と空の造形』田路貴浩著 p.20、l.9-20、p.21、l.1)

[42]『欧州の庭園』戸野琢磨著 p.172、l.10-12

参考文献、URL

・『海外の庭園様式（概要）｜庭園鑑賞入門』(http://teien.1arts.net/gaikoku/)